

# 令和5年度入学者一般選抜入学試験問題

## (B日程 人間生活学部 子ども学科)

### 小論文

#### 注意事項

- 1 試験時間は、午前10時から午前11時までである。
- 2 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 3 この試験では、問題冊子(2ページ)、解答用紙1枚及び下書き用紙1枚を配付する。
- 4 試験開始の合図があつてから、解答用紙に**受験番号を必ず記入すること(氏名の記入は不要)**。
- 5 解答は、解答用紙の所定の欄に**横書き**で記入すること。所定の解答欄以外に記入した解答は無効である。
- 6 問題冊子及び解答用紙にページの欠落や印刷不鮮明な部分等がある場合は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 7 原則として、試験時間中の途中退室は認めない。  
ただし、具合が悪くなった場合、トイレに行きたくなった場合等は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 8 試験終了の合図があつたら直ちに筆記用具を置くこと。
- 9 試験終了の合図があつて筆記用具を置いたら、机の上に問題冊子と下書き用紙を重ねて置き、その上に表にした解答用紙を重ねて置くこと。
- 10 試験監督者の許可があるまで退室しないこと。

様々な背景や特徴をもつ他者と共生するために必要な視点について、2つの資料の筆者の主張を踏まえながら、600字以上800字以内で論じなさい。

【資料1】

今よく「ダイバーシティ&インクルージョン」という標語を聞きます。「多様性と包摂」。もちろん、すてきな目標です。ぜんぜん悪くない。でも、これって、微妙に「上から目線」だと思いませんか。

つまり、「多様性を認めよう」と言っている人って、自分はその集団における「正系」に属しており、「メンバーシップ」を確保しており、「オレたちとはちょっと毛色の違ったのが何人かいてもいい」というニュアンスを漂わせている。「包摂」もそうですよね。「他者や異物を包摂しよう」という人って、「包摂する側」にはじめから立っている。

いや、それが悪いと言っているんじゃないんです。それで上等です。でも、ちょっと「上から目線」「中から目線」じゃないかと思うんです。ちょっとですけど。

もちろん、僕は「上から目線・中から目線」を止めろと言っているわけじゃないんですよ。「はしなくも、無自覚な優位性・内部性を露呈し」とか言い出したら、「元の木阿弥」ですからね。どうやって、そういうところから抜け出そうかという話をしているときに、「そういう話」を始めてどうする。「君たち、そういう優越的な態度をただちに止めなさい、反省しなさい、恥じ入りなさい」とか、そういうことを僕は言っているわけじゃないんですよ。勘違いしないでください。僕は「それで上等」と申し上げているんです。それで結構ですから、これからもそういう態度をどんどん続けてくださっていいんです。

でも、「上等」にも「その上」があるんじゃないかと思っているんです。

できるできないは別として、もし「上等の上」があるなら、それをめざしてもいいんじゃないかと僕は思うんです。それは透視図法における消失点のようなものです。実体じゃない。作業上の擬制です。でも、それがないと絵が描けない。そういうものとして「多様性と包摂の上」があってもいいんじゃないか。

それは何かというと、言葉が平凡過ぎて脱力しそうですけれど、「親切」です。

「人に親切にする」ということは、相手より立場が上でなくても、グループのフルメンバーでなくても、できる。

ちょっとしたことなんです。電車で席を譲ってあげるとか、荷物を持ってあげるとか、エレベーターで「お先にどうぞ」と声をかけるとか。そういうふうな「かたちのあること」だけに限りません。極端な話、相手が「親切にされた」と気が付かなくてもいいんです。朝ゴミ出しをしにゆくときに登校する子どもたちを見て、「今日一日元気でね」と心の中で手を合わせるとか、その程度でいいんです。別に相手から具体的な助力や支援を求められているわけじゃないけれど、自分の方から一步を踏み出す。自分から始める。自分が起点になる。「心の中で手を合わせる」くらいでも「一步を踏み出す」にカウントしていいと僕は思います。だったら、そんなに難しい仕事じゃありません。

僕はそういう「親切」がとても大切だと思うんです。

出典：内田樹『コロナ後の世界』 文藝春秋 2021年 一部抜粋

## 【資料2】

コロナ危機の中で、フランスの経済学者ジャック・アタリの「合理的利他主義」という考え方に注目が集まりました。アタリは、利他主義という理想への転換こそが、人類のサバイバルの鍵であると主張します。自らが感染の脅威にさらされないためには、他人の感染を確実に防ぐ必要がある。利他主義であることは、ひいては自分の利益となるというのです。つまり、利他主義は最善の合理的利己主義に他ならないというのがアタリの主張です。

彼は、利他的行為によって最も恩恵を受けるのは、その行為を行っている自己であるという「間接互惠システム」を説いています。利他行為を「善意」から解放し、利己的なサバイバル術として運用すべきというのですが、どうでしょう？ やはり何か引かかるものが残りませんか？ 結局のところ、利己的欲望の実現やサバイバルのために「利他」を利用する構想は、利他が持っている豊かな世界を破壊し、利己的世界観の中に閉じ込めてしまうのではないかという思いが、どうしてもよぎります。

もし利己主義的な利他行為が広がっていけば、本当に利他の循環が起きるのか、私には疑問です。「利己的な利他行為」を受け取る側としては、常に「それって、あなたの利益のためにやっているんだよね？」という思いが湧き起こるため、受け取った利他のバトンを他者に受け渡そうとする思いが、失われるのではないのでしょうか。利己的なメッセージ付きの贈り物は、やはり不愉快です。「これがいずれ私に利益をもたらしますように」と暗に記された物・行為を受け取っても、利他の喜びは想起されません。むしろ嫌な気持ちになりますよね。

利他には様々な困難が伴います。偽善、負債、支配、利己性……。利他的になることは、そう簡単ではありません。

しかし、自己責任論が蔓延し、人間を生産性によって価値づける社会を打破する契機が、「利他」には含まれていることも確かです。コロナ危機の中で私たちの間に湧き起こった「利他」の中にも、新しい時代の予兆があるのではないのでしょうか。

では、どうしたらいいのか？

私は利他の本質に「思いがけなさ」ということがあると考えています。利他は人間の意思を超えたものとして存在している。

出典：中島岳志『思いがけず利他』 ミシマ社 2021年 一部抜粋